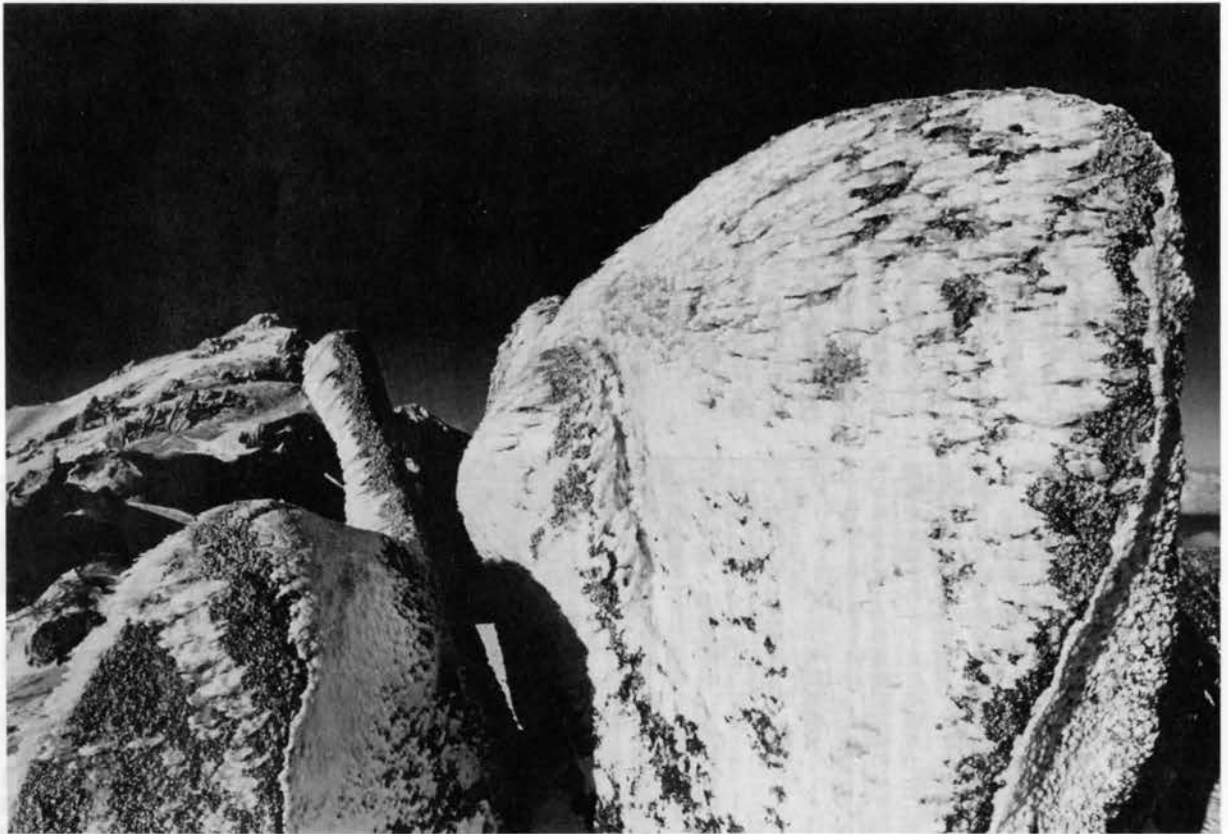


# 山と博物館

第33巻 第9号

1988年9月25日

大町山岳博物館



燕岳 — 燕岳を象徴する写真の一枚  
正月の午後 大川 淳 撮影—

百名山から外された一名山

大川 淳

百という「ワク」が存在し、それ以上の数があれば、当然はみ出てしまう……。冷厳な事実ではある。

深田久弥氏はその山を選択するに当って、初めのうちは、どんどん、それに入れる山、外す山と決めていったに違いない。

ところが数が百に近づくに従って、残り枠と山数が一致しないのに気づき、どうしたものかと悩み、作業を一時中断し、もう一度それぞれの山の見直しを始めた……。

現代のこの社会は効率至上主義で動いていて、イエスカノーか、オンカオフかで判断されがちである。確かにその方が良い場合もある。

しかし、イエスでもあり、ノーでもあるような事や、結果よりむしろ途中の経過が重要であるというような事も多い。

特に人間に関することや、その個性というような問題は、イエス、ノーだけでは判断しにくいのが事実である。

何かを選択するということは、当然そのための基準があり、それにもとづいて判断される……。

そして、決定された事柄については、判断した側の認識、見識、価値観等が、当然ながら反映されてしまう……。

と、まあこんなふうと考えてみると、燕岳という山は、深田久弥氏が最終的に「百」にしばるに当って、どうしたものかと惑わされた山々の一つであったという事実。

彼がちゅうちよせずに、その百に入れた山は、もちろん名山に違いない。

しかし、それにも増して「深田久弥氏をして、判定するに当って、悩ませた山」……。

というこの事が示すものは、深い味わいのある、豊かな個性を持った名山であると、逆に言えるのではないかと思う。

この山、燕岳は。

(山岳写真家)

# 『聖職の碑』を讀む・歩く

福与邦夫

## 1、題名について

諏訪市出身の作家、新田次郎の代表作の一つで映画化もされたこの作品を、最近改めて読み返したり、同じ登山コースを歩いたりしてみた。

新田作品は「強力伝」「孤高の人」「槍ヶ岳開山播隆上人」「八甲田山」を始め登山に関わるものが多く、ひまをみてはよく書く。以下に『聖職の碑』に関する所感など綴ってみたい。

「聖職」とは、神聖な職業、仕事の意。一般にはキリスト教での宣教師その他の職をいうが、ここでは教職、教師を指す。

「碑」は石十文で石碑、即ち石に刻まれた文字、文章。ここでは後に述べる碑文を指している。

従って、「聖職の碑」とは尊い職業である教職にある者が、己れの信念、決意を後世に伝えるべく石に刻み込んだ文字、文章ということになろう。作者の願いのこもった巧みな命名の題だと思ふ。

## 2、碑文について

「碑」は中央アルプス宝剣岳(将基頭山間の縦走路沿いの、大きな花崗岩の自然石(高さ五[五]位)に筆太に刻み込まれている。

四季、いつも花束が捧げられ、碑文に見入ったり参拝したりする登山者の姿をよく見かける。建立以来八十年近い歳月が流れているのでやや読みにくい文字もあるが、次のようにはっきり刻み込まれている。

大正二年八月二十六日中箕輪尋常高等小学校長赤羽長重君は、修学旅行のため児童を引率して登山し、翌二十七日暴風雨に遭って終に死す。  
遭難記念碑

本来ならば、当然遭難慰霊碑のはずがなぜ遭難記念碑なのか。また遭難者でなくどうして共殞者共に殞れ逝った人なのか。そしてこのような碑を誰が中心になつて建てたのか。山の稜線に建てられた、死者の霊を慰めるような言葉が一切使われていないこの「碑のナゾ」を解くべく、当時の教育界の様子も織り込みながら物語は劇的に展開していく。作者が長年月をかけて史実を丹念に調べて歩き書き上げた力作だけに、何回読んでも感



「聖職の碑」を歩く会で (S 63.7.10)



(原作本より)

銘深い作品である。

## 3、修学旅行登山の発端(背景)

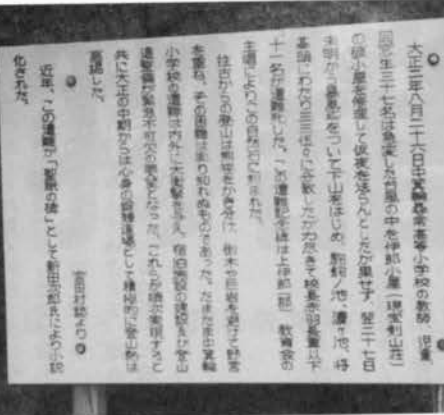
時は大正の初め。舞台は上伊那郡箕輪町の中箕輪尋常高等小学校(今の中学校に当る)。現在は中部小学校になっている。

同校は赤羽長重校長(四十三歳)以下職員が26名。

当時、長野県には白樺派教育の新しい流れが起り、同校も若手教師を中心に賛同者が多く、赤羽校長を中心とした実践主義教育としばしば対立する。

高い理想・夢を掲げ、人間尊重・至愛の精神を育成しようとする新しい考えと、生来は正しくも強くないはずの児童に体験の場を与えて鍛練し、困難に打ち克つ人間を作ろうとする考えとが、駒ヶ岳の実施の是非をめぐる話し合いでもきびしく対立した。

### 遭難記念碑



碑の傍に立っている説明板

#### 4、当日の行動概要

●八月二十六日  
 学校集合(四・〇〇)一同発(五・三〇)  
 南箕輪村大泉(七・〇〇)―伊那市外の内  
 ノ蓋(登山口、一〇・〇〇) ※ここまです  
 でに16km、5時間歩いていて一同発(一〇  
 ・三〇)―胸突八丁―稜線(十五・〇〇)―  
 濃ヶ池―伊那小屋跡(十七・三〇頃)。

(※伊那小屋は現在の宝剣山荘付近にあつた四・五坪程の山小屋だが、暴風雨が焼失かのため飛ばされていて、形骸だけであつた)  
 ―急造の屋根作り(修理)(十八・三〇頃)  
 (※暴風雨の中、37人が寒さに震えて狭い小屋内で一夜を過ごす。夜半に一名死亡、騒乱状態となる)  
 ●八月二十七日  
 夜明け(四・〇〇頃)―皆、全身が濡れ、疲労が激しい。凍死の危険が迫る。普段なら一時間弱で行ける木曾小屋へも猛烈な風雨のため行く能わず、やむなく昨日来た道を引き返すことにする。

稜線を歩く中、隊は三々五々となり犠牲者が相次いで出る。  
 ―樹林帯着(十二・三〇頃)―内ノ蓋へ急報(征矢教諭。十五・三〇)↑第一次救助隊出動(十六・三〇)。村をあげての大騒ぎとなる。

運命の二日間の行動は大体このようである。稜線へ出てからの猛烈な暴風雨(出発前に測候所へ問い合わせているが、約八十年前の天気予報である)や予期せぬ山小屋損壊(下見は行なかつた?)等の悪条件が重なり、かの赤羽校長の力をもってしても防ぎ切れな

い不慮の事故となつた。登山を取り止めたり

と宣言する。  
 十四、十五歳の子どもたちを高山へ連れていくことの不安、困難を十分承知の上で、最終的には校長自身の責任において実施していくことになる。

参加はすべて希望制で、高等科男子25名(42名中)、地元青年会員9名、引率教諭3名の計37名。  
 このうち結局、男子生徒9名、青年会員1名と赤羽校長の計11名が不帰の客となつてしまふ大悲劇が待っているとは、何人も予測し得なかつたのである。

(五) 第三十四百千一第 日 四 十 開新日毎演情日十三月八年二正大 (可題物便郵三第)

## 胸ヶ嶽山頂大悲劇

▲九死一生を得た  
 ▲一番後から山頂に上った  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた

▲九死一生を得た  
 ▲一番後から山頂に上った  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた

▲九死一生を得た  
 ▲一番後から山頂に上った  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた

▲九死一生を得た  
 ▲一番後から山頂に上った  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた

▲九死一生を得た  
 ▲一番後から山頂に上った  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた  
 ▲見守り続けた



信毎の子供の会  
 主 催 信

信毎の子供の会  
 主 催 信

途中で引き返すことも考えないわけではなかったと思うが、子どもたちに体験の場を与え鍛錬したい願いをもつ赤羽校長の方針は、退却を潔しとしなかったであろう。

当時の、未整備の登山ルートや木材を組み立てただけであろう旧式の山小屋の状況等から推察するに、この修学旅行登山の実施にあたって、赤羽校長は自らの進退をかけていたことがうかがわれる。登らないのが安全で、楽で、保身にもなる。それを敢えて子どもたちを高山に挑ませた背景には、聖職に生きる赤羽校長の教育愛・情熱・信念が強く存在していたはずである。無為からは、過失もない代りに、成功・成長・歓喜・感動も生まれないのだ。

もう一つ見逃せないのは、行程の長さ、きつさである。今日の中学校集団登山の軽く二倍は歩いている。食料も衣服も装備も極端に乏しかったであろうあの時代に、教師、子どもたちがどうしてこのようなエネルギーをもっていったのか、ただ驚くのみ。仮に今、当時の食料、装備で箕輪町から徒歩で駒ヶ岳に登って素泊りで粗末な山小屋に泊まり、翌日下山するコースを考えてみたとき、進んで参加して無事に行つて来られる校長・教諭・生徒はそう多くはないだろうし、だいたい希望者が現われまい。

5、ことば  
本文中に、例えば次のような表現があり参考になる。

○「登山には、多少なりとも困難を伴うものがある。困難を乗り越えるところに登山の意味がある。困難がなければ鍛錬の意味がない」  
○赤羽校長の趣味は読書と歩くことである。

彼は毎朝一時間半の散歩を楽しんでいた。○「高い山はどんな日でも風は吹いているものだ。天気が悪くなったのではない。これが当たり前なのだ。私は今度で七回目の駒ヶ岳登山だ。安心してついで来るがいい」

○赤羽は自分の上衣の下に着ている冬シャツを脱いで、寒さに震えている平井に着せた。胸の合せ目やボタンの穴から寒風の針が赤羽の肌を刺した。やがて二人の最期のときがきた。

○「引率して行った生徒が一人でも死んだら、私の主人も生きてはいません。生きて帰れるわけがございません。主人は間違ひなく死んでいます」  
実在の主人公赤羽校長の言動は示唆に富んでいて今日でも立派に通用する。

自分の衣服を脱いで傍らの生徒に着せ、やがて二人して最期のときを迎える彼の行動はまさに聖職者といえるし、陰で彼を支える夫人のこともば天つ晴というほかはない。

6、今改めて思うこと

大正二年という遠い昔(?)に実際に起きた事故を、山の作家らしく見事にまとめ上げたこの作品に出会って以来、なぜか心魅かれ、四年前の秋と今年の七月、内ノ葎から同じコースを歩いてみた。歩きながら一人で物思いにふけつたり、リュックから本を出して読みながら歩いてみたり、「追体験」の登山もなかなか味わい深いものがあった。

さて、最初に記した「碑のナゾ」について、かいつまんでいえばおおよそ次のようになろうか。

—上伊那教育会として、遭難事故は遺憾この上ないと考えるが、赤羽校長が自らの身を

減ぼしてまで実践された修学旅行登山並びに遭難発生の際の殉職者の行動までを否定するものではなく、逆に高く評価して、後世への警鐘・教訓としたい。結果的には遭難を発生せしめたが、赤羽校長の方針・登山の精神は教育会として受け継いでいく所存である。

参加募集に進んで応じて困難な山行に挑戦し、自らを鍛錬しようとしたけなげなる子どもたちにも、共犯者として、深甚なる敬意を表したい。

石工が相当の日数をかけて懸命に彫り刻んだ姿も思い出されて、碑文はこう我々に語りかけているのだろうし、事実十二年後には登山は再開され、今日まで脈々と続いている。

あの事故から八十年近くを経過した今日、集団登山・遠足・キャンプ等の野外活動は弱体化してないかどうか、いとすれば原因は何か。また、「この案の実施を諸君に宣言する」くらいの、己れの身命をかけるほどの強力なリーダーシップが、いずこにか、あるのかないのか。そして、一校の事故を、郡教育会が責任を負うほどの連帯感が、今も残っているのか、いないのか…。

「聖職の碑」を読みながら、歩きながら、あれやこれや思いをめぐらすことの多い昨日である。

(元長野県山岳総合センター専門主任 現飯田市鼎小中学校教諭)

博物館だより

絵画の寄贈

大町市内、東山の麓にも居を構えておられる画家、中川力先生から油絵(左写真)をご寄贈いただき、現在1Fホールに展示中です。



山路 中川 力作 F15

※本紙第32号巻9号に中川先生の記事がありますのでご参照ください。

秋の草花とキノコ展(於講堂・入場無料)

恒例の本展は9月30日〜10月4日の間開催。10月2日にはキノコ鑑定会と友の会のキノコ学習会も開催します。

山と博物館第33巻第9号

発行所 長野県大町市 TEL220-2211  
印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館  
大栄タイムス印刷部  
定価 年額1,100円(送料共)切手不可  
郵便振替口座番号(長野四)二二二九三